2019年度　事業計画実践報告会　　抄録

主題	独居を支える小規模多機能
副題	地域の中で支える事とは？M様の事例

発表者	小枝　由佳	所属	小規模多機能 ホームさくら
発表補助者・ 共同研究者等		所属	小規模多機能 ホームさくら
	小規模多機能ホームさくら職員一同		

自部署の役割 特徴等	ご利用者の状況に合わせて事業所への「通い」や「泊まり」、ご利用者の自宅への「訪問」を組み合わせ、住み慣れたご自宅や地域での生活をできる限り継続できるよう支援しています。

報告の概要	約6年に渡り、認知症を抱えた独居の方を支えてきた経緯を辿ります。 ご本人の状況の変化・その事に伴う提供サービスの拡充、また、並行する地域住民の受け止め方の変化、それらを振り返った上で、改めて認知症を抱える独居の方々を出来る限り住み慣れたご自宅や地域での生活を続ける為に必要な事とは何なのか、を考えます。

《取り組んだ課題》
①二度の入院に伴うご本人の変化への対応。
②保護頻度の増加に対する地域住民への働きかけ。

《活動の成果と評価》
①利用当初の服薬管理から始まり、M様の状態に合わせ、生活支援（食事・掃除・買い物など）や排泄介助、不安の傾聴などを臨機応変また継続的に支援を続ける事で、認知症が進行し医者や看護師からは「限界ではないか？」と意見が出る中でも在宅を続ける事が出来た。②挨拶回り・ビラ配りをした事で、保護された際それまでは暮らしの保健室や警察を介する事が多かったが、さくらへ直接連絡が入る事が増えた。またご挨拶をし顔を繋ぐ事で、地域住民の本音が少しずつ聞こえてきた。

《具体的な取り組み》
①ご本人の状況変化に対応したサービスの拡充。
②地域住民への挨拶回り・配布物の作成。

《今後の課題》
「今後同じような利用者様が出てきた場合どのようにしていくのか？」という部分で、今回の反省点が挙げられます。①集合住宅であった事で、生活に直結する住民の不安に気づくのが遅かった。②さくらにとって初めての事例だった為、どのタイミングでアプローチをかけたらいいのかも分からず、周りから少しずつ声が上がり始めてからの動きであった。またさくらの存在をもう少し早い段階で周辺住民の方に知っていただく事やお住まいの地域の特性を知っておくという事も必要である思います。